

# バス・アリア「歯が一本、もろくなり、冷たさが沁みる」 K.209a への考察

野口秀夫

## 1. はじめに

鳥代：アリア「いとしい人よ、もし私の苦しみのすべてを」 K.deest に関しウィリアム・カウデリーは次のように指摘していました。「メタステージの歌詞を用いておらず、楽器編成に第 2 ヴァイオリンを欠く点が、同時期のモーツァルトのほかのコンサート・アリアと異なっている。しかし、楽器編成は、初期のアリアでは、1775 年 [ママ] に書かれたアリアの断片《砕け凍った歯が》[表題訳については後述] (K<sup>6</sup>.209a) と共通するものでもある」<sup>注1</sup>。

犬輔：K.deest の歌詞については既に議論したから、楽器編成が新しい着眼点だ。両曲とも第 2 ヴァイオリンを欠いていると言うんだね。

鳥代：でも、楽譜上にヴァイオリンが 1 段しか書かれていないからと言って「第 2 ヴァイオリンを欠く」という言い方が正しいかどうかは疑問よ。例えばレーオポルト・モーツァルトの「田舎の結婚式」は 1 段で“ヴィオリニ・ウニゾニ”となっているわ（譜例 1）<sup>注2</sup>。

譜例 1 L・モーツァルト「田舎の結婚式」

犬輔：第 1・2 ヴァイオリンをユニゾンで演奏するということなのかな。

鳥代：そうだと思うわ。ヘンデルのオペラ《パルテノペ Partenope》の序曲（譜例 2～4）<sup>注3</sup>は第 1 部から第 3 部まで表記が変化していて、第 3 部のトゥッティ・ウニゾニが第 1・2 ヴァイオリンと第 1・2 オーボエをユニゾンで演奏するという略記であることが分かるのよ。

譜例 2 《パルテノペ》序曲 第 1 部

譜例 3 同 第 2 部

譜例 4 同 第 3 部

教授：ユニゾンでないものも示しておこう。二重ト音記号の場合だ<sup>注4</sup>。1 段で書かれていても符尾によって第 1・2 ヴァイオリンを分けて演奏する。Violini と複数形で書かれている点に注意（譜例 5）。これは主にモーツァルト親子が使用した簡略表記だ。多くは管楽器パートに見られるが、このようにヴァイオリンパートにもある。

譜例 5 ホルン協奏曲 変ホ長調 K.447

鳥代：では、K.deest と K.209a に話を戻しましょう（譜例 6<sup>注5</sup>、譜例 7<sup>注6</sup>）。ふーん、ヴァイオリン声部の表記は violini unisoni でも二重ト音記号の violini でもなく violino だわ。

譜例 6 K.deest 楽器編成

譜例 7 K.209a 楽器編成

犬輔：比較表にしてみましょう。ほう、双方で共通するのはヴァイオリンとバスだけですよ。

表 1 楽器編成の比較

作品	ホルン	ヴァイオリン	ヴィオラ	チェンバロ	バス	備考
K.deest	2	1	1	1	1	オーケストラ
K.209a	1	1			1	オーケストラ？

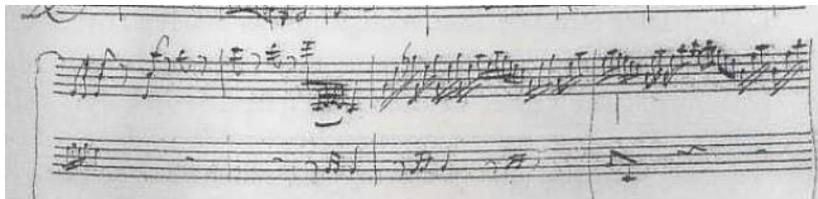
教授：全く異なるという方が理解の助けになる。K.deest は「第 2 ヴァイオリンが欠けている」と言えるが、K.209a は「特殊な編成」と言うべきで、曲の内容、あるいは演奏環境のいずれかがその理由であろう。オーケストラでなく、ソロ楽器による伴奏かも知れない<sup>7</sup>。

犬輔：K.209a がどういう曲なのか興味が湧いてきました。

鳥代：早速調べてみましょう。

## 2. 歌詞の訳と解釈

教授：最初に断片の状況を共有しておこう。スイスの個人蔵で、新全集の X/30/4 に Fr1772e [K.209a] としてファクシミリが載っている<sup>8</sup>。一葉の自筆譜で、キリエ ニ短調 K.90 (短い曲なので完成曲) の裏にそれぞれが 4 段からなる 3 システム drei Akkoladen zu je vier Systemen で (ドイツ語の音楽用語はややこしい<sup>9</sup>) 16 小節が書かれている。そのヴァイオリンとホルンの 13-16 小節を載せておこう (譜例 8) <sup>10</sup>。



譜例 8 K.209a ヴァイオリンとホルンのパート 13-16 小節

犬輔：あっ。これを見ると 17 小節から先も作曲されていることは明らかですね。おそらく、2 枚目以降が紛失していて、そこで曲は完成していた可能性が高いと思われます。

鳥代：では自筆譜の歌詞を訳してみましょう。断片なので途中までで切れています。

L'AMMALATO Un dente guasto e gelato dal vermi divorato, m'ha fatto tanto dolor! Tanto dolor! Oh... Oh! L'ho mostrato: Ferro e pellicano Ferro e pellicano, ma non ha voluto ritornar sano non ha voluto ritornar...	患者 歯が一本、もろくなり、冷たさが沁みる。 虫に食われて、 私はとても痛い！ とても痛い！ おお… おお！ 私が歯に見せたのは： 梃子 (てこ) とペリカン 梃子とペリカン。 しかし、歯は 治療を嫌がった 治 [療] を嫌がった… (以下不明)
--	--

犬輔：流布しているタイトル「砕け凍った歯が」<sup>11</sup>や「朽ちて冷えた一本の歯」<sup>12</sup>、「冷たく痛む歯の」<sup>13</sup>、そして英語の“A rotten frozen and worm-eaten tooth”<sup>14</sup>など、どれもしっくりこなかったけど、鳥代さんの訳を見て納得しました。

鳥代：イタリア語のジェラート gelato は、名詞では“イタリア風のアイスクリーム”のことだけれど、形容詞では“氷の、凍った、非常に冷たい”の意味ね。但し、歯に使ったときには形容詞で“冷たさの沁みる”の意味になるの。

犬輔：guasto も形容詞で“壊れた、傷んだ、悪くなった”の意味だけど、“denti guasti”で“虫歯”のことだから“砕けた”は言い過ぎだよ。“脆 (もろ) い”という訳は適切だね。

教授：“ペリカン”は抜歯器具の専門用語だ。器具の爪の形が鳥の嘴に似ているのでそのように呼ばれ、1400 年頃から麻酔が発見され普及するまで使われていた<sup>15</sup>(図 1 <sup>16</sup>、図 2 <sup>17</sup>)。



図 1 18 世紀のペリカン

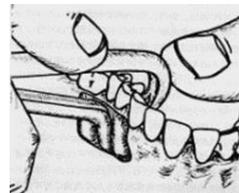


図 2 ペリカン使用の図

犬輔：もう一つの“ferro”は“鉄”だから英語や日本語ならアイロンのことで、英語では動詞の iron が“アイロンがけする”という意味にもなりますよね。でも、イタリア語ではそうではないようで、ferro の動詞形“ferrare”は“蹄鉄を打つ、金輪で締める”なんだ。

教授：イタリア語でアイロンは“ferro da stiro (フェッロ・ダ・スティエーロ)”だ。“stiro”は動詞“stiare アイロンがけする”の名詞形“アイロンがけ”なのだ。イタリアではアイロン以前に ferro と呼んでいたもの（蹄鉄、金輪あるいは歯科用器具）があったからアイロンにはこのような言い方が必要になったのだろう。日本語だと iron をアイロンと言ったりアイアンと言ったりできるからイタリア語の苦労はピンとこないかも知れないがね。このように鉄はいろいろな道具に使われてきたから、各国で分野別に様々な意味を持ってきた言葉だ<sup>注18</sup>。

鳥代：イタリア語の“ferro”が歯科用器具の何を意味していたのかを調べたところ、歯科保存学のイタリア人専門家による論文が、モーツァルトの歌詞のこの部分を elevator と英訳していることが分かりました<sup>注19</sup>。これは日本の歯科用語ではドイツ語に直して“ヘーベル Hebel”あるいは“梃子(てこ)”と称する器具のことです。

教授：抜歯梃子は古くから現在に至るまで使われている抜歯器具の一つである。アラビアの医師アブー・アル＝カースィム・アッ＝ザフラウィー（西洋ではラテン語読みでアルブカシス Albucasis 936-1013）以来、多くの医師達が種々の大きさや形の梃子を考案している。歯槽骨と歯の間に先端部を入れ、梃子の作用により小さな力で強い力が生ずることを利用して歯槽骨から歯牙を脱臼させるものである<sup>注20</sup>。（図3<sup>注21</sup>、図4<sup>注22</sup>、図5<sup>注23</sup>）。



図3 抜歯梃子の使用例

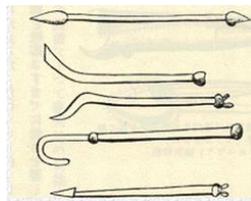


図4 アルブカシスの抜歯梃子



図5 現代の抜歯梃子

### 3. 歌詞の原典及び作曲の目的を探る

犬輔：ケッヒェル第 6 版にはこう書かれています<sup>注24</sup>。「[K.209a に関して]アインシュタインは、K.209、K.210 および K.217 と同様、他の作曲家のあるオペラブッフアの上演用と考え、そのオペラはおそらくゴルドーニ Carlo Goldoni(1707-93)作『マルマンティーレの市 Il Mercato di Malmantile』の第 1 場であろうと推定していた。このオペラは 1772 以来ザルツブルクの合唱長 Chormeister [正しくは宮廷楽長 Kapellmeister] であったドメニーコ・フィスキエッティ Domenico Fischietti (1725-1810) によって作曲された。しかし、当時のザルツブルクのオペラのレパートリーについてはほとんど知識がないため、これは単なる推測に過ぎない」。当のアインシュタインはケッヒェル第 3 版あるいは第 3 改訂版でこの曲に番号を付けていませんし、『モーツァルト 人と作品』でも言及していませんのでこの情報の出典は不明です。

鳥代：ゴルドーニの音楽のための滑稽劇《マルマンティーレの市》はフィスキエッティが作曲して 1757-1758 の謝肉祭シーズン中の 1757.12.26 にヴェネツィアで初演されています<sup>注25</sup>。

犬輔：それではアインシュタインの説に従ってゴルドーニの音楽のための滑稽劇『マルマンティーレの市』から第 1 幕第 1 場を翻訳してみましょう。

<p>ATTO PRIMO Scena prima. Piazza rustica in pianura con fabbriche antiche, e in distanza il castello di Malmantile sopra una collina. Varie botteghe amovibili, con merci e Venditori, che formano il mercato, e vari Contadini e Contadine che vendono i loro prodotti. <i>Berto, Lena e Cecchina ai loro posti. Lampridio, il Conte della Rocca e Brigida che passeggiano per il mercato, e Rubiccone da un lato per esercitare la sua professione.</i>  <i>Tutti cantano come segue:</i> Che bella festa, che bel mercato! Qui tutto è bello, qui tutto è grato: non vi è castello più signorile del bel castello di Malmantile. Aria sanissima, - terra buonissima, che giocondissima - per noi sarà.</p>	<p>第 1 幕 第 1 場 古代の建物がある平地の素朴な広場。 遠くには丘の上にマルマンティーレ城。 さまざまな移動可能な店が 商品や売り手とともに市場を形成し、 さまざまな農民男女が 製品を販売している。 ベルト、レーナ、チェッキーナが位置につき、 ランプリーディオ、ロッカの伯爵とブリジータが 市場を散歩している。一方、ルビッコネは 彼の仕事を実践しようとしている。  全員が次のように歌う： なんと素晴らしい祭り、市場でしょう！ すべてが素晴らしく、感謝に満ちています： マルマンティーレの美しい城ほど 風格のある城はありません。 とても健康な空気、——とても良い土地、 なんと楽しい——それは私たちのものです。</p>
--	--

<p><b>LENA, CECCHINA E BERTO</b>          Chi vuol capponi, chi vuol galline?          Chi vuol comprare le ricottine?          Chi vuol dell'ova, si accosti qua.</p> <p><b>CONTE, LAMPRIDIO E BRIGIDA</b>          Chi va, chi viene, chi compra o vende;          ed al mercato le sue faccende          ciascun può fare con libertà.</p> <p><b>RUBICCONO</b>          Ecco, signori, l'operatore.          Io sono un medico di gran valore          che a tutti reca la sanità.</p> <p><b>TUTTI</b>          Che bella festa, che bel mercato!          Qui tutto è bello, qui tutto è grato!          Non vi è castello più signorile          del bel castello di Malmantile.          Aria sanissima, – terra buonissima,          che giocondissima – per noi sarà.</p> <p><b>LAMPRIDIO</b>          Che dice, signor Conte,          di questo bel mercato?          Ne ha veduto un più bello in altro stato?</p> <p><b>CONTE</b>          Certo, ve lo protesto,          il mercato miglior non vi è di questo.          Ma voi di Malmantile          degno governatore,          lo rendete migliore, e a meraviglia          cresce la sua beltà la vostra figlia.</p> <p><b>LAMPRIDIO</b>          Oh, signor, mi confonde...          troppa grazia mi fa coi detti suoi...          (<i>a Brigida</i>)</p> <p>Al complimento rispondete voi.</p> <p><b>BRIGIDA</b>          Risponderò, come da me si suole,          liberi sensi in semplici parole.          Il Conte della Rocca, Per grazia, per bontà,          non ha fatto che dir la verità.</p> <p><b>LAMPRIDIO</b>          Che tu sia benedetta!          (Pare una dottoressa.)</p> <p><b>CONTE</b>          Il padre è stolto, e un po' leggera è anch'essa.</p> <p><b>LENA, CECCHINA E BERTO</b>          Chi vuol capponi, chi vuol galline?          Chi vuol comprare le ricottine?          Chi vuol dell'ova, si accosti qua.</p> <p><b>LAMPRIDIO</b>          (Cotesti contadini          che vengono al mercato,          l'utile che mi vien non mi hanno dato.          Ho del Conte un pochin di soggezione.)          Via, signor Conte, andate,          passeggiate, comprate;          e voi, figliuola mia,          lo dovete servir di compagnia.</p> <p><b>CONTE</b>          Se l'onor mi concede,          eccomi qui a servirla.          (<i>offre la mano a Brigida</i>)</p> <p><b>BRIGIDA</b>          Sono tutta disposta a favorirla.          (<i>parte col Conte</i>)</p>	<p><b>レーナ、チェッキーナ、ベルト</b>          去勢雄鶏はいかが、雌鶏はいかが？          リコッタチーズを買いませんか？          卵が欲しい人は、ここにいらっしゃい。</p> <p><b>伯爵、ランプリーディオ、ブリジーダ</b>          行くのは誰で、来るのは誰か、売買は誰か？          そう、この市場での商売は          それぞれが自由に行うことができます。</p> <p><b>ルビッコネ</b>          紳士諸君、ここに術者参上。          私はとても役に立つ医者です。          すべての人に健康をもたらします。</p> <p><b>全員</b>          なんと素晴らしい祭り、市場でしょう！          すべてが素晴らしく、感謝に満ちています：          マルマンディーレの美しい城ほど          風格のある城はありません。          とても健康な空気、——とても良い土地、          なんと楽しい——それは私たちのものです。</p> <p><b>ランプリーディオ</b>          伯爵殿、この美しい市場についてどう思われますか？ 別の州でもっと美しいものを見たことがありますか？</p> <p><b>伯爵</b>          もちろん、私は断言します、          このように最適な市場はありません。          しかし、あなたはマルマンディーレの立派な知事であり、それをより盛り立てれば、          あなたのお嬢様の美しさが目を見張るようになるでしょう。</p> <p><b>ランプリーディオ</b>          ああ、伯爵、それは私を混乱させます...          彼女は言葉で私をとことんやり込めるので...          (ブリジーダへ)          お前からお褒めの言葉にお答えしなさい。</p> <p><b>ブリジーダ</b>          いつものように、自由な感覚の簡単な言葉で答えましょう。          ロッカの伯爵は、恵みのために、善のために、真実を語る以外に何もしませんでしたね。</p> <p><b>ランプリーディオ</b>          めでたし、めでたし！          (まるで女医のようだ)</p> <p><b>伯爵</b>          父親は愚かで、彼女も少し軽率だ。</p> <p><b>レーナ、チェッキーナ、ベルト</b>          去勢雄鶏はいかが、雌鶏はいかが？          リコッタチーズを買いませんか？          卵が欲しい人は、ここにいらっしゃい。</p> <p><b>ランプリーディオ</b>          (市場にやってくる          これらの農民、          私に来るはずの利益を彼らは私に与えない。          私は伯爵に少し畏敬の念を抱いている)          さあ、伯爵殿、歩いて、          行って、買ってください。          そして、娘よ、お前は          彼に仲間として仕えなければならぬのだ。</p> <p><b>伯爵</b>          名誉が私に与えられれば、          ここで私はあなたに仕えることになっています。          (ブリジーダに手を差し伸べる)</p> <p><b>ブリジーダ</b>          私はそれをまったく喜んで支持します。          (伯爵と去る)</p>
--	--

<p>RUBICCONE Ecco, signori, l'operatore. Io sono un medico di gran valore, che a tutti reca la sanità.</p> <p>LAMPRIDIO (Anche costui che dicesi medico operatore, dée col governatore far la sua obbligazione, se vuol esercitar la professione.) Galantuomo.</p> <p>RUBICCONE Signore.</p> <p>LAMPRIDIO Una parola.</p> <p>RUBICCONE Eccomi ad obbedirla. (<i>si accosta</i>) Se ha qualche malattia, saprò guarirla.</p> <p>LAMPRIDIO Io, per grazia del ciel, nella mia età godo la sanità.</p> <p>RUBICCONE Sfortuna mia.</p> <p>LAMPRIDIO Bacio le mani di vossignoria.</p> <p>RUBICCONE Signor, chiedo perdono. Per far veder chi sono, davvero, io bramerei che avesse almen cinque malanni o sei: la sciatica, la gotta, la febbre, lo scorbutto, il mal d'orina, piaghe, fistole, doglie per la vita, e sarebbe da me tosto guarita.</p> <p>LAMPRIDIO Signor operatore, grazie al vostro buon cuore. Io bisogno non ho del vostro aiuto, ma alla carica mia chiedo il tributo.</p> <p>RUBICCONE Subito, immantinente. Un tesoro, signor, darle destino: eccole per i calli un cerottino.</p> <p>LAMPRIDIO Io non voglio cerotti...</p> <p>RUBICCONE Ecco un arcano, da cui vedrà portenti: la polve mia per risanare i denti. <b>Denti guasti, gelati, dal verme divorati, deboli, traballanti, nelle mascelle infranti, senza ferri, tanaglie e pulicani, colla polvere mia ritornan sani.</b></p> <p>LAMPRIDIO Della polvere vostra noi parlerem da poi. Ora voglio da voi...</p> <p>RUBICCONE Prenda, signore, prenda questa porzion del mio liquore. Questo è un liquor gemmato coll'oro incorporato, d'erbe composto, di radici e sali,</p>	<p>ルビッコーネ 紳士諸君、ここに術者参上。 私はとても役に立つ医者です。 すべての人に健康をもたらします。</p> <p>ランプリーディオ (自身を術者と呼ぶ 御仁であっても、 仕事に着手したいのであれば、 義務として知事に 支払いすべきなのである) 先生よ。</p> <p>ルビッコーネ 旦那様。</p> <p>ランプリーディオ お言葉を。</p> <p>ルビッコーネ ここではあなたに従います。 (互いに近づく) あなたが病気になれば、私はあなたを癒します。</p> <p>ランプリーディオ 私は、天国の恵みによって、 この年齢で健康を楽しんでいます。</p> <p>ルビッコーネ 私には不運ですな。</p> <p>ランプリーディオ 私はご主人様の御手にキスいたします。</p> <p>ルビッコーネ 旦那にはお許しを願いたい。 私が本当に誰であるかを示すために、 誰かに少なくとも 5つまたは6つの病気を持ってもらいたい： 坐骨神経痛、痛風、 発熱、壊血病、排尿痛、 炎症、瘻孔 [ろうこう：歯肉の出来物]、人生の苦痛、 そして彼はすぐに私によって治るでしょう。</p> <p>ランプリーディオ 術者殿、 心から感謝します。 私はあなたの助けを必要としませんが、 私の責務への賛辞をお願いします。</p> <p>ルビッコーネ すぐに、直ちに。 旦那、一つの至宝が運命を与えます。 これらが足のマメ用膏薬です。</p> <p>ランプリーディオ 膏薬はいらん…</p> <p>ルビッコーネ こちらは秘薬です。 そこから奇跡が示されるでしょう： 歯を癒すための私の散薬。 <b>もろく、冷たさが沁み、 虫に食われ、 弱く、ぐらついた歯が、 動きが取れなくなった顎の中で、 梃子、ヤットコ [鉗子]、ペリカンを使わずに、 私の散薬により治癒します。</b></p> <p>ランプリーディオ それではあなたの散薬について 話すことにしよう。 今私はあなたから欲しい…</p> <p>ルビッコーネ 旦那、私のリキュールの この部分をお取りください。 これは金を組み込み 宝飾された酒で、 ハーブ、根、塩、そして</p>
--	---

<p>di balsami, di gomme e minerali, buon per la digestione, buon per la convulsione, per calcoli, per febbri ed etisia, per dolori di corpo e idropisia. LAMPRIDIO Buon per quel che volete; ma voi non intendete quel che or da voi pretendo... RUBICCONE Eh, sì signore, intendo. Ella crede ch'io sia un di coloro ciarlatan chiamati. Ecco qui gli attestati delle cure che ho fatto. Favorisca... LAMPRIDIO Io non voglio saper... RUBICCONE Senta, e stupisca. Noi sottoscritti facciamo fede a chi ne dubita, a chi non crede, che Rubiccone l'operatore è un uomo celebre, è un gran dottore, che ha fatto cose da inorridir. A Boboli ha guarito un etico spedito; a Siena ha risanato un povero stroppiato; a Pisa ad un idropico donò la sanità. E per la verità diciamo ed attestiamo, che il gran dottore, l'operatore, ha risanati tanti ammalati, che dai maledici speziali e medici perseguitato, fu discacciato per impostor. Viva il gran medico, l'operator. (parte)</p>	<p>香油、樹液、ミネラルで構成され、 消化に良し、 けいれんに良し、 結石、発熱、浮腫、 体の痛みやむくみに適しています。 ランプリーディオ あなたが望むものには適しています。 しかし、あなたは私が今、 何を求めているのか理解していません… ルビッコネ ええ、そうです、そのとおり。 私が偽医者と呼ばれる者の一人だと 思っているご婦人はおります。 これが私の行った治療の証明書です。 よろしければ… ランプリーディオ 知りたくない… ルビッコネ 聞いて、驚いてください。 私たち署名者は、 疑う人よ、信じない人よ、 術者のルビッコネは 有名人であり、偉大な医者であり、 ぞっとすることをした人であると信じます。 ボボリでは、 消耗性の熱をすぐに下げました。 シエナでは、 傷ついた心を持った貧しい人を癒しました。 ピサでは、 浮腫のある男性に医療を施しました。 そして実際、 私たちは、 偉大な医師である 術者が、 呪われた薬剤師や 医師によって 迫害された非常に多くの 病気の人々を癒し、 彼らを詐欺師として 追放したことを証明します。 偉大な医者、術者万歳。(退場)</p>
---	--

教授：謝肉祭にいつも登場したのは山師でもある歯科術者であった。彼は考えられるすべての病  
気に対してアドバイスした。ほとんどの場合彼は魔術師のような格好をしており黒の山高  
砂糖帽 [Zuckerhut : 砂糖を円錐状に固めた形の帽子。紋章によく描かれているタケノコ状の絵も言う] やカ  
バラのシンボルそして動物などが描かれた、あるいは刺繍された職服を身に着けていた。  
彼の傍らには彼の名声を宣言し、マスターが間違いのない手段を持っていたすべての病氣  
を列挙したディレクターが立っていたという<sup>注26</sup>。

鳥代：この台本の結末はどうなるのですか。

教授：登場人物たちは多かれ少なかれ騙されるが、最後は「非常識な男はもっと悪いことするも  
のだ」と認識を改め、知事のランプリーディオは「私は山師として世界中で活躍したい」  
とまで宣言する。ルビッコネは知事の娘のブリジーダに対し、「私があるあなたの夫なら、  
少なくともあなたは私と一緒に楽しむことができます。空腹のためにあなたはそうしたい  
のでしょうか」と結婚を申し込み、あれよあれよという間に承諾を得る。最後に「世界中の  
多くの人々が似たような所業をしています。そうじゃないですか。紳士諸君？」と問いかけ、  
全員が「そのとおりです、そのとおりです」と締めくくるのだ。

犬輔：謝肉祭の清濁を併せ飲み、肯定的に歌い上げているんですね。詐欺師が日常化した現代の  
世相から見るとぼくたちにはおいそれと肯定しにくいですが。

鳥代：犬輔さんはモーツァルトの歌詞と共通点がある言葉を朱記してくれているけれど、抜歯で  
はなくて散薬で治す<sup>注27</sup> と言っているし、一般論なので歯が複数になっているわ。少なく  
もこのルビッコネのレチタティーヴォ「こちらは秘薬です Ecco un arcano」(譜例 9)<sup>注28</sup>  
部分にモーツァルトが K.209a を挿入あるいは差し替えしたとは、ルビッコネ (悪役ゆえ  
テノール) が患者役 (バス) を歌うわけがないことから考えられないわ。



譜例 9 フィスキエッティ《マルマンティエーレの市》から第 1 幕第 1 場ルビッコネのレチタティーヴォ

犬輔：では、別の場面に K.209a を挿入したと仮定してみましょう。その場合、歌えるのはベルトあるいはランプリーディオ（上演歌手の都合により何れかがバスとなる<sup>註 29</sup>）ですが、もし、その患者役が歌詞通り抜歯は嫌なので（紛失部分で）散薬を使いたいと歌うのだったら、「K.209a がフェスキエッティのこのオペラの上演用に作曲された」というアインシュタインの仮説は成立するかもしれません。でも必要な仮定が多すぎますよ。

鳥代：モーツァルトが歌詞を参考にしたのが、フィスキエッティのオペラ経由だったのか、直接ゴールドーニの台本からだったのか、どちらだったのでしょうか。

犬輔：ケッヘル第 6 版は「当時のザルツブルクのオペラのレパートリーについてはほとんど知識がない」と述べていますが、最近新しい資料も発見され、このオペラに関しては 1773 年の謝肉祭にザルツブルクで上演されたことを示す台本が見つかっています。その表紙には「マルマンティエーレの市。詩人・芸術家ポリッセノ・フェージェイオ [アッカデーミア・デリ・アルカディでのゴールドーニの仮名] による音楽のための滑稽劇。大主教ザルツブルク君主・大司教の命令により 1773 年のカーニバルに宮廷で上演される」と書かれています<sup>註 30</sup>。

鳥代：モーツァルトは《ルーチョ・シッラ》の初演のため 1772.10.24 からザルツブルクを離れていたため、上演には参席できなかつたのですが、フィスキエッティが大司教と契約した 1772.9.5 からの 2 か月弱の間に台本に接する機会があったのではないかと思います。

教授：モーツァルトが何故台本と異なる歌詞に作曲したのか、次に考えてみなさい。

#### 4. 曲の成立時期

犬輔：そもそもこの断片はいつ作曲されたのだろうか。

鳥代：ケッヘル第 6 版 (1964)<sup>註 31</sup> は「伝えられるところでは 1775 年にザルツブルクで作曲」としていて、新全集 (1972)<sup>註 32</sup> では「1775 以前 (プラート)」と説明され、楽譜の冒頭にも「おそらく 1775 以前」と印刷されています。新全集校訂報告 (2003)<sup>註 33</sup> には作曲年の記載はなく、フランツ・ギーキングからの「透かしは縦に約 23mm 間隔の線があるのみ」という報告が転載されていて、透かしの年代は分からないということのようよ。

犬輔：でもその後プラートは『モーツァルトの自筆譜への貢献 II. 筆跡年代学 1770-1780』(1976/77) において「KV209a “Un dente guasto e gelato” (フラグメント) : 1775 (KV6) の日付は支持できない。この作品は 1772 年に属する。つまり曲がった形の d の筆跡が示すとおり、年の後半、7 月から 9 月頃、少なくとも 3 回目のイタリア旅行の前である。シート裏 [表裏で言えばむしろ表] に記載されているキリエ KV90 は、ほぼ同時に書かれた」とかなり年代を絞り込んでいます<sup>註 34</sup>。

鳥代：あっ、それは 1772.9.5 から 1772.10.24 の間にモーツァルトがフェスキエッティの《マルマンティエーレの市》の台本に接する機会があったのではないかと、わたしがさっき言った仮説への大きな裏付けになります。

犬輔：モーツァルトは《マルマンティエーレの市》のルビッコネ<sup>註 35</sup> のレチタティーヴォを参考にして、14 歳以来歯痛に苦しめられている自らの悩み<sup>註 36</sup> をアリアにしたのではないかと。つまりモーツァルト自身を歌ったパロディ作品と言ってもいいのではないだろうか。

鳥代：ヴァイオリンが虫歯の疼 (うず) くような音を奏でます。同じ旋律で「おお」と呻 (うめ) くのですが<sup>註 37</sup>、ヴァイオリン合奏でなくソロで奏される方が「一本の歯」の疼きにふさわしいわ。全体がソロ編成ではないかというのはそのようなところからも言えましょう。

## 5. 手本となった曲は？

犬輔：K.209a にはバロック的な特徴があると漠然と思い、本当にバロック音楽に同様な特徴を見出せるのか気になって、冒頭の部分（譜例 10）に似たものがあるか調べてみたんだ。

譜例 10 モーツァルト：バス・アリア「歯が一本、もろくなり、冷たさが沁みる」K.209a

ヘンデルにありそうなので、当てずっぽうに《水上の音楽》、《王宮の花火の音楽》や《メサイア》など片っ端から確認したけど、なかなか見当らなかった。でもやっとオラトリオ《サムソン Samson》第 2 幕 第 4 場にハラファのアリア「我が名誉と武器はそのような敵を軽蔑する Honour and arms scorn such a foe」があるのが見つかったんだ（譜例 11）<sup>注 38</sup>。

譜例 11 ヘンデル：オラトリオ《サムソン》からハラファのアリア「我が名誉と武器はそのような敵を軽蔑する」

鳥代：メロディ・ラインが（ソ）、ドド（ド）ド（レ）ミレドソ、ド（レ）ミレドソドで、括弧内以外は全く同じね（移動ドで表現しました。オクターヴと長短は区別していません）。

犬輔：歌の部分ではモーツァルトの方はソ、ドドドドドと歌ってからホルンが受け継いで前奏の後半を奏し休止します（譜例 12）。ヘンデルの方はドドドドと歌ってからメリスマで前奏の後半を歌って休止します（譜例 13）。基本的には似た手法であり、それぞれが時代スタイルに応じた声部割付をしたものと思われる。

譜例 12 モーツァルト K.209a 歌い始め

譜例 13 ヘンデル《サムソン》からハラファのアリア「我が名誉と武器は」歌い始め

鳥代：ホルンの使い方は時代スタイルの差でもあるのね。一方バス歌手が歌い、ヴィオラが無く、ヴァイオリンが 1 段というところは共通だわ。但し Violini unisoni（第 1・2 ヴァイオリンのユニゾン）ね。

犬輔：譜例 11 にソロ (senza rip.) とトゥツティ (con rip.) があるので編成はオーケストラですね。

教授：ヘンデルのオラトリオ《サムソン Samson》HWV 57 (1741) はイギリスの詩人ミルトン John Milton (1608-74) の韻文悲劇『闘士サムソン Samson Agonistes』(1671) にもとづき、ニューバラ・ハミルトン Newburgh Hamilton (1691-1761) によって翻案されたテキストに作曲された。『闘士サムソン』はギリシア悲劇にも比すべき格調の高い作品で、ペリシテ人に捕らえられ、両眼をえぐり取られて、ガザで苦役に服していたサムソンの死を主題としている。作者は『旧約聖書』の「士師 (し) 記」中の記事を素材にして、さまざまな誘惑にあい (たとえば和解という形をとった妻デリラの誘惑など)、これをはねのけ、闘技場に出てペリシテ人の命とともに自らも命を絶つ彼の行動を描いている。作者はこれを悲劇とよんでいるが、サムソンの死そのものに焦点を置き限りでは、それは妥当する。しかし、サムソンが罪を犯し、苦しみ、悔い、神の意志に従って行動した事実を考えれば、これは悲劇ではなく、神の摂理を明らかにしようとした「喜劇」である<sup>注 39</sup>。

犬輔：ハラファは「巨人族でガトのハラファ」と紹介されている。ガトはペリシテ人が定着して五市連合を形成していた 5 つの自治都市（アシュドド、アシュケロン、エクロン、ガザ、ガト）のうちの一つですね。

教授：ハラファの眼前で苦役に服しているサムソンは、彼が噂に聞いた数々の手柄から想像してきた姿とは似ても似つかぬもの。ペリシテ人の英雄と自負するハラファが剣をまじえれば、その剣の汚れとなるであろう存在なのである [アリア「我が名誉と武器はそのような敵を軽蔑する」]。しかし、読者の前に登場してくるハラファは見栄っ張りの実体のない存在で、笑うべき相手でしかない。そして同様にかつてのサムソンも笑うべき存在ではなかったかということに気づかされる<sup>注40</sup>。

鳥代：ヘンデル／ハミルトンの歌詞を翻訳しておきましょう。第 2 幕第 4 場の途中までです。

ACT TWO SCENE 4 RECITATIVE	第 2 幕 第 4 場 レチタティーヴォ
MICAH No words of peace, no voice enchanting fear, A rougher tongue expect. Here's Harapha, I know him by this stride and haughty look. (Enter Harapha and Philistines.)	ミカ [サムソンの友人] 平和の言葉も、魅惑的な恐怖の声も、これ以上の乱暴な言い方を期待しません。これがハラファです。私はこの歩幅と高慢な表情で彼を知っています。 (ハラファとペリシテ人が登場)
HARAPHA I come not, Samson, to condole thy chance; I am of Gath, men call me Harapha; Thou know'st me now. Of thy prodigious might Much have I heard, incredible to me! Nor less displeas'd, that never in the field We met, to try each other's deeds of strength. I'd see if thy appearance answers loud report.	ハラファ サムソン、儂はお前のチャンスを許すために来たのではない。儂はガト出身で、ハラファと発する。お前は今儂を知ったのだらう。儂はお前の驚異的な力について、多くのことを聞いているが信じない！儂らがお互いの力を試すために現場で会ったことがないことにさほど不満はない。出場したお前が声高らかに答えを返すものかどうか見てやろう。
SAMSON The way to know, were not to see, but taste.	サムソン 見て知るのではなく、経験して知るのだ。
HARAPHA Ha! Dost thou then already single me? I thought that labour and thy chains had tam'd thee. Had fortune brought me to that field of death, Where thou wrought'st wonder with an ass's jaw, I'd left thy carcass where the ass lay thrown.	ハラファ ハ！ お前はすでに儂に挑戦しているのか？ 儂は労役と足枷がお前を飼いならしたと思っておる。 お前は驢馬の顎で驚異的戦果を得た <sup>注41</sup> その死の現場に、幸運が儂を連れて行くなら、驢馬が投げられた場所にお前の死骸を残そう。
SAMSON Boast not of what thou would'st have done, but do.	サムソン 汝がしたであろうことを自慢するのではなく、することを自慢せよ。
HARAPHA The honour certain to have won from thee I lose, prevented by thy eyes put out; To combat with a blind man, I disdain.	ハラファ お前が目を失ったことに妨げられて 儂はお前に確実に勝ったという名誉を失う、 盲人と戦うことを、儂は軽蔑する。
AIR	アリア
HARAPHA Honour and arms scorn such a foe, Though I could end thee at a blow; Poor victory, To conquer thee, Or glory in thy overthrow! Vanquish a slave that is half slain: So mean a triumph I disdain. Honour and arms. . . da capo	ハラファ 名誉と武器はそのような敵を軽蔑する、 儂はお前を一撃で終わらせることができるが； お前を征服することは 貧しい勝利であり、 むしろお前の転覆の栄光となる！ 半分殺された奴隷を打ち負かすただけだ； それは儂が軽蔑する勝利を意味する。 名誉と武器は… ダカーポ

犬輔：ハラファは空威張りだから上行音型が多用されている（オスミンを思い起こす）けど、モーツァルトの方は疼きの描写や呻き声で下行音型が印象的だ（バスティアン No.8 を思い起こす）。

鳥代：モーツァルトの“梃子とペリカン”がヘンデルの“名誉と武器”に対応しているように思えてなりません。こじつけでしょうか。

犬輔：もしそうであれば、“梃子とペリカン”を使うのに難色を示したことへの言い訳を正当化する空威張りが音で表現されていることになるね。

鳥代：そう。弱気一辺倒で歌われた後、紛失部分で治療の代案が出されてはさらに否定されていくという展開もありだと思わ。散薬も候補の一つよ。心（私）と体（歯）の行き違いだけを狙った滑稽アリアと決めつけるのは危険だね。

教授：さて、モーツァルトがヘンデルを聴くチャンスは、いつどこであったというのかね。

犬輔：ヘンデルは専門外だけど…

教授：そもそもモーツァルトにしても専門家ではない諸君たちだろうが。

犬輔・鳥代：はい、早速調べます。

鳥代：オラトリオ《サムソン》はコヴェントガーデンで 1765.3.6/8 と 1765.3.20/22 の 4 回上演されていまして<sup>注42</sup>。レーオポルトは 5 年前に亡くなったヘンデルの人氣が衰えていないのを知り、息子の紹介記事にヘンデルの名前を併記している<sup>注43</sup> くらいだからヴォルフガングがレーオポルトに連れられてオラトリオを聴いた可能性は高いわね。

犬輔：モーツァルトは楽想を温めながら 7 年前に聴いた曲を思い出したんだ。ぼくも音楽の専門家でないながら K.209a の楽想から逆にヘンデルを想起したくらいなんだから。

教授：では“借用”だとしてヘンデルも押さえておこう…。ずばりヘンデルは“借用魔”だった。

鳥代：そういえば談話室でも話題になったことがありました<sup>注44</sup>。

犬輔：もし今回のアリア「我が名誉と武器は」が他の曲からの借用曲だったら、K.209a は孫引きということになり、遡っての議論もしなくてはなりません。

教授：それが必要かどうかは諸君たちで調べなさい。

犬輔：はい。シェドロックの記事がありました<sup>注45</sup>。へえー「クロッチ博士が遺した《サムソン》のスコアの処々に借用の元曲情報が書き込まれている」とのことで、約 15 箇所もの借用とされる部分が挙げられています。ええと、そこにハラファのアリアは含まれていません。K.209a が孫引きとなる恐れはなさそうです。

鳥代：犬輔さん、この本を見て！<sup>注46</sup> ヘンデルに関する借用研究はこんなにも進んでいるわ。《アグリッピーナ》のアリア「悪意であれば *Se giunge un dispetto*」の借用状況が表になっていて、10 箇所にも亘って 5 つの作品から借用されているというのよ。

Table 1: Sources of *Agrippina*, 'Se giunge un dispetto' (Version A)

A = *Almira* (1705), 'Der Himmel wird strafen'  
 B = Cantata *Tu fedel? tu costante?* (copied May 1707), 'Se non ti piace amarmi'  
 C = *Vincer se stesso è la maggior vittoria* (first performed ? Nov 1707), 'Dell' Iberia al soglio invitto'  
 D = Cantata *Arresta il passo* (performed July 1708), 'Al dispetto di sorte crudele'  
 E = ibid, 'Non si può dar un cor'

Bars in 'Se giunge'	Bars in sources				
	A	B	C	D	E
1-8		1-4			
9-12	32-3			46-8	
13-16					15-16
37-42				34-7	
49-57			18-22	31-4*	
65-70					29-31
101-8				57-61	
127-30	66-7		47-9		
138-44				84-7	

\*lacks the last 2 bars in 'Se giunge'

犬輔：脱帽です。モーツァルトにおける借用研究はとてもここまで徹底できません。

## 6. まとめ

犬輔：楽器編成についてはバス歌唱部との受け渡しスムーズかつコミカルなホルンを採用し、歯の疼きの表現にソロ・ヴァイオリンを当て、そして低音弦楽器としてバスを入れ必要最小限の伴奏としたのでしょ（ゆえにヴィオラまでは必要としなかった）。バロック的な響きは“旧スタイル”に当てつけたパロディというわけではなく、ヘンデルのオラトリオ《サムソン》から“武器・道具の使用に難色を示す”アリアを本歌取りしたゆえでしょう。

鳥代：歌詞についてはゴルドーニ/フィスキエッティのオペラ《マルマンティーレの市》から、虫歯の治療を題材にしたレチタティーヴォにヒントを得たモーツァルトが、自身の 1772 年時点における歯痛の悩みをアリアに織り込んだのでしょ。演奏は内輪の仲間で行われ、“歯痛をやり過ごす”——紛失した続きの部分に散薬が言及されていたとすれば“散薬は鎮痛のみで治癒はしない”が加味される(?)——という自虐的パロディだったと思われ。でも実際に歌ったのはモーツァルトではなく(彼はテノールでした<sup>注47</sup>) 同僚のバス歌手で、モーツァルトはヴァイオリンを弾いたのではないでしょか。

教授：もう一つ仮説を提起しておこう。K.375c、K.375d、K.396、K.446、K.516f、K.532、K.571a などプライベート作品は断片で残っている。楽譜が公刊されないように、しかし備忘のために、モーツァルトがわざと断片にしたものが含まれている可能性もゼロではない。

- 注 1: ニール・ザスロー、ウィリアム・カウデリー 編/森泰彦 監訳/安田和信 監訳補助『モーツァルト全作品事典』音楽之友社、2006 年
- 注 2: Denkmäler deutscher Tonkunst, Zweite Folge: Denkmäler der Tonkunst in Bayern; Jahrg. IX/2: Ausgewählte Werke von Leopold Mozart (pp.138-153), Leipzig: Breitkopf und Härtel, 1908. Plate D.d.T.i.B. XVI.
- 注 3: Georg Friedrich Händels Werke. Band 78, Leipzig: Deutsche Händelgesellschaft, 1879. Plate H.W. 78.
- 注 4: 毎日クラシック『モーツァルトの二重ト音記号』(2020.5.8)、Cherubino モーツァルト探求を参照
- 注 5: NMA II/7/1: Arien, Szenen, Ensembles und Chöre mit Orchester · Band 1, Notenedition (Kunze, 1967), p.59
- 注 6: NMA II/7/4: Arien, Szenen, Ensembles und Chöre mit Orchester · Band 4, Notenedition (Kunze, 1972), p.149
- 注 7: NMA X/30/4: Fragmente, Notenedition (Konrad, 2002)の Kritischer Bericht, p.228 でウルリヒ・コンラートは Fr 1772e の項で Arie “Un dente guasto e gelato “ für Baß [und Orchester?] KV\*209a とし、楽器編成のオーケストラに疑問符を付けている。
- 注 8: 前掲 NMA X/30/4, p.18
- 注 9: Wikipedia: Stuff (music). 総譜において一つの五線を“段(和)”“Staff(英)”“Staff(米)”“System(独)”と呼び、同時に演奏される五線群を“システム(和)”“System(英・米)”“Akkolade(独)”と呼ぶ。
- 注 10: Dr. Stefano Eramo / Dean, Department of Restorative Dentistry and Endodontics / University of Perugia, Perugia, Italy / Dr. Livio Gallottini / Dr. Guido Migliau / Department of Restorative Dentistry / Sapienza University, Rome, Italy / Mozart: The Toothache Of A Genius, in: Journal of the History of Dentistry / Vol. 59, No. 3 Winter 2011., pp.129-134. (esp. p.131)
- 注 11: 《砕け凍った歯が》では永久凍土から発掘されたマンモスの歯を連想せざるを得ない。
- 注 12: すずき歯科医院デンタルニュース 44 号 (2012.11) < <https://www.suzuki-shika.net/dental-news/201211.pdf> >
- 注 13: 森下未知世 Mozart con grazia < <http://www.marimo.or.jp/~chezy/mozart/works/arial.html> >
- 注 14: Lucien Karhausen: The Bleeding of Mozart, Xlibris Corporation, 2011
- 注 15: 神奈川県歯科保健総合センター「歯の博物館」< <https://www.dent-kng.or.jp/museum/ja/hanohaku13/> >
- 注 16: 18th Century Dental Pelican Tooth Puller Extractor < <https://www.worthpoint.com/worthopedia/18th-century-dental-pelican-tooth-140710164> >
- 注 17: 『歯科の歴史』から < [https://www.dent-kng.or.jp/chishiki/museum/hakubutukan/gaikoku\\_bassi/3000.htm](https://www.dent-kng.or.jp/chishiki/museum/hakubutukan/gaikoku_bassi/3000.htm) >
- 注 18: (似た例として machine は日本語でマシン、絶叫マシンとなり、ペルシャ語で ماشین (マシーン) は自動車となる。
- 注 19: 前掲 Dr. Stefano Eramo, p.131
- 注 20: 「歯の博物館」< [https://www.dent-kng.or.jp/chishiki/museum/hakubutukan/gaikoku\\_bassi/4000.htm](https://www.dent-kng.or.jp/chishiki/museum/hakubutukan/gaikoku_bassi/4000.htm) >
- 注 21: やましろ歯科口腔外科 < <https://yamashiro-dent.com/dentaltherapist/まっすぐの親知らずの抜歯> >
- 注 22: 川上為次郎『歯の医学史』から < [https://www.dent-kng.or.jp/chishiki/museum/hakubutukan/gaikoku\\_bassi/4000.htm](https://www.dent-kng.or.jp/chishiki/museum/hakubutukan/gaikoku_bassi/4000.htm) >
- 注 23: DDP Elevador de raíces #60 L (izquierda) Punta cóncava de pala instrumentos dentales (Amazon サイト)
- 注 24: Ludwig Ritter von Köchel: Chronologisch-thematisches Verzeichnis sämtlicher Tonwerke Wolfgang Amade Mozarts. Nebst Angabe der verloren gegangenen, angefangenen, übertragenen, zweifelhaften und unterschobenen Compositionen desselben. Breitkopf & Härtel. 6. Auflage, Wiesbaden 1964, Hrsg. von Franz Giegling, Alexander Weinmann und Gerd Sievers
- 注 25: Il mercato di Malmantile. Dramma giocoso per musica di Polisseno Fegejo pastor arcade da rappresentarsi nel Teatro Grimani di S. Samuele il carnevale dell'anno 1758. - Venezia: Modesto Fenzò, 1758
- 注 26: Chledowski, Kazimierz: Das Italien des Rokoko, 1915 < [https://archive.org/stream/gri\\_33125015152404/gri\\_33125015152404\\_djvu.txt](https://archive.org/stream/gri_33125015152404/gri_33125015152404_djvu.txt) >
- 注 27: レオポルトからナンネル宛「歯痛止めの粉薬などを同封しました」(1785.1.7) は治療薬ではなく鎮痛薬。
- 注 28: D-DI: Mus.3269-F-2
- 注 29: RISM ID no.: 858000517 (上演年場所不明) ではベルトがバス、RISM ID no.: 270001168 (1766 ドレーズデン上演) ではランブリーディオがバス。
- 注 30: Il mercato di Malmantile. Dramma giocoso per musica di Polisseno Fegejo p.a. da rappresentarsi in Corte per comando di s.a.r. l'Arcivescovo e Principe di Salisburgo nel carnevale del 1773. - [Salisburgo : 1773]. なおここで s.a.r = Sua Altezza Reverendissima である。所蔵図書館は A-MB: Michaelbeuren Benediktiner-Abtei Michaelbeuren, Bibliothek und Musikarchiv, (オーストリア ミヒャエルポイエレンのベネディクト修道院図書館・音楽アーカイヴ) および D-AM: Amberg Provinzialbibliothek (ドイツ アムベルク図書館)。The New Grove Dictionary of Music and Musicians によればフィスキエッティはドレーズデンをクビになり、ヴィーンに滞在中の 1772.9.5 にザルツブルクとカペルマイスターの 3 年契約を結んだ。西川尚生『モーツァルト』音楽之友社 2005、117 頁には大司教宮殿で 1772-78 年にコロレド就任記念や歓迎行事に上演されたオペラのリストが掲載されているが、1773 年(日月不明)にはフィスキエッティの新作《アマゾンの女王テレストリ》が載っている。
- 注 31: 前掲 Ludwig Ritter von Köchel, 6. Auflage
- 注 32: 前掲 NMA II/7/1
- 注 33: NMA II/7/3-4: Arien, Szenen, Ensembles und Chöre mit Orchester · Band 3 & 4, KB (Küster, 2003), p.133
- 注 34: Wolfgang Plath: Beiträge zur Mozart-Autographie II. Schriftchronologie 1770 - 1780 (1976/77)
- 注 35: 前掲 Dr. Stefano Eramo, p.131 では Rubiccone という名前は rubicondo (血色の良い) と briccone (いたづら者) の合成だと説明している。
- 注 36: レオポルトから妻への手紙 (1770.4.28 ローマ) に「ヴォルフガングは [中略] いつものように少しばかり片側が歯痛です」とあり、《ミトリダーテ》作曲中にも「数日間、ヴォルフガングは歯に膿瘍があり、顔の片側にわずかな炎症がありました」との手紙がある (1770.11.17 ミラーノ)。注 10 の著者は「歯の膿瘍 Zahnfluß は文字通り歯の分泌物または排液を意味し、ヴォルフガングは感染した歯の開口部から顔の側面に向かって洞路を発達させたようだ。この洞路の発達は、おそらく彼の病根である歯の状態の緩和に貢献したと思われる。1766 年にかかった天然痘による顔のあばたは、彼の顔の時折の開口部を覆い隠し、おそらくカモフラージュした可能性があると考えられる」と注釈している。1774.12.28 のミュンヘンからの手紙ではとうとう「ヴォルフガングは 6 日間も、顔がすっかり腫れ上がったまま家にこもってなければなりませんでした。頬は外側も内側も腫れてしまい、右眼もつぶれ、2 日間というもの、スープだけの食事しかできませんでした」と報告されている。
- 注 37: 《ドン・ジョヴァンニ》のフィナーレではドン・ジョヴァンニやレポレロの「あー」に合わせて第 1・2 ヴェイオリンが下行音型を奏するが、歌唱声部は下行音型ではなく、一つの長音で記譜されている。
- 注 38: Georg Friedrich Händels Werke. Band 10, Leipzig: Deutsche Händelgesellschaft, 1861. Plate H.W. 10.
- 注 39: 日本大百科全書(ニッポニカ)「關土サムソン」の解説
- 注 40: 飯沼万里子『神の道化として——『闘技者サムソン』の一つの読み方』平安女学院短期大学紀要/Bulletin of Heian Jogakuin (St.Agnes') College, 14, 16-27 (1983)
- 注 41: サムソンが驢馬の頸の骨をふるってペリシテ人 1000 人を打ち殺したことを指す
- 注 42: Ilias Chrissochoidis: English oratorio in London - the 1765 season, excerpt from dissertation Stanford University 2004
- 注 43: パブリック・アドヴァタイザー紙 (1764.5.31) 「彼の父親は彼を英国に連れてきたが、彼の同郷人であるかの著名なるヴァーチュオーソの故ヘンデルが、その生前、あれほどの庇護を受けた王国で、息子が成功を収めるだろうと疑わなかったからである」。(レオポルトの下書きによるものと思われる)
- 注 44: 野口秀夫「M・ハイドンの高山右近劇《キリスト教徒のゆるぎなさ》——モーツァルトへの影響」神戸モーツァルト研究会 第 259 回例会 2018 年 4 月 1 日、6 頁
- 注 45: J. S. Shedlock: Handel's Borrowings, in The Musical Times, September 1, 1901, p.599-600
- 注 46: John H. Roberts: Why did Handel borrow? in Handel, Tercentenary Collection, University Rochester Press, 1987, p.90
- 注 47: George Hogarth: Memoirs of the Opera in Italy, France, Germany, and England, R. Bentley, 1851, p.198 (コンスタンツェから 1829 年に聴取した通信員の手紙を The Musical World が 1837 年に掲載。そのまた転載) (作成: 2021 年 9 月 16 日、改訂: 2022 年 3 月 1 日)